

## 偉大なる底力

佐藤孝治

終戦の年二十年十一月政府の打出した「緊急開拓事業実施要領」に基づき国策として開拓行政なるものが発足した、その開拓行政が軌道に乗るまでに幾多の紆余曲折を経ている。

その情勢の中で、五里霧中に入植して開墾に取組んでいた数多くの開拓者が寄り所もなく、行き当りばったりで不安と焦燥を抱きながら、その日その日を過ごしていた。

そう云う環境の中で、茨城県内の開拓者が寄り合って帰農者同盟（後の開拓者同盟）をつくり、更に全国の同志に呼びかけて全日本開拓者連盟を結成するきっかけをつくった。

戦後のあの混乱した世相の中で、われわれの先駆者はよくも時勢を見極めて、この組織づくりを成し遂げたと今でも感心している。あれから早くも三十年を経過して今日の基礎を築くことが出来た、誠に感謝に堪えない。

そして昨年三月十八日、全国開拓三十周年記念式典が東京赤坂のニッショウホールで行なわれ、続いて戦後開拓史完結編が刊行されて、開拓三十年の一つの締めくくりができた。

本県においては、今年の三月二十四日開拓三十周年記念婦人部大会を婦人会館で開催して、三十年にわたる開拓婦人の労を犒うとともに開拓事業の表舞台に出ない開拓婦人の陰の

力を賞揚した。

元来婦人の力というものは華々しく表面化しない所に云うに云われぬ底力を秘めているものと私は思っている。

明治生れの旧い観念からする見方と云われるかも知れないが、表面に立ってぐいぐい同志を引きずって行く男同志の活動とは違って、陰でもものも云わずに家庭を締めくくって行く経営の裏方を勤めると云うことは並大抵のことではない筈だと思う。

大八洲の組合は、利根川鬼怒川の合流点のデルタ地帯を開拓した常習水害地であった。

昭和二十一年十一月入植して最初に作付した二十余町歩の作物は、翌年のカサリン台風の水害で全滅したのを手始めに、四年連続の水害で有名になったが、その最初の台風の急襲にあつて田畑は丈余の水中に没し、仮住まいの天幕は家財一切とともに流失、命からがら六軒離れた浅間山の天幕まで豪雨の中を老人や婦人の手に手を取り数珠つなぎになって、夜の十一時頃までかかって暗闇の中を避難した最初の水魔の洗礼を受けた時のことを思い出す。

翌朝台風一過空は美しく晴れ上がり、田畑は一面海のよう

になった。遙か彼方に富士山の嶺がくっきり姿を現わしているのが見える。丘の浅間山の天幕の前で朝食を食べながら、「懸念していたことは云え余りに急激な大水害で皆さんがっかりしただろう。これからもこの様な水害がないと云う保証はない。堤防の出来上がるのも何年先のことになるか解らない。此処が見込がないと思ったら、この水のある今のうち足でも洗って何処かに行った方がよいではないか」と聞いてみた。

ところが、夫がシベリアに抑留されて未だ帰らない若い女性から即座に「おらあの家はあの流作の水の中の天幕しかない。水が引いたらまたあの天幕で暮し開拓して行く。昨夜の大雨の中での避難は大変だったが、命に別状ないだけ未だよいではないか。ひどいと云ったってたったの一晚じゃないか。終戦後の一カ年の避難生活から見たら何と云うこともない。おらあの住む所はここだけだ、皆んな頑張りましょう」の言葉が返ってきたので、さすがの私もぎくりと心に応えた。

常日頃何も云わない女のこの一言に、芯の強いのに吃驚、

逆に私が激励される形になった。

責任の重大さを痛感し、これからはうっかりしていられないと善後処理に本気に取組まざるを得なかった。

あれから三十年になる。その間いろいろと悪循環を繰返えし、積重ねられて、今日の基盤を築き上げることができた。

これはうちの開拓女性の一例に過ぎないが、女の力と云うものは事に当って「愚痴をこぼさない、不平を云わない、最後まで諦めない」と云った具合に、長い間にじっと絶え忍んでいく根強い力をどこかに備えている。

こうした開拓女性の偉大な底力によって仕上げた姿が開拓三十年の今日であり、驚くべきものがあつたと心から敬服している。

そして、今もこれからも婦人の陰の力によって開拓の事業も日本の農業も守り育てられて行くであろうことを信じて止まない。

(県開拓連30周年記念祭への寄稿より)